

書 評

『フィールドの見方』

増田研・梶丸岳・椎野若菜 編
古今書院, 2015 年, 214 ページ
定価 2800 円 (税別)

はじめに

本書は、いわゆる文系理系双方におけるさまざまな学問分野のフィールドワーカーが、どのように研究をしているかを記したエッセイをまとめたものである。研究成果というよりは、研究のプロセスやモチベーション、研究対象への思いなどが主に記されている。こうした研究の裏側は、通常の論文には記述されない分、新鮮な興味でもって楽しく読み進められる。たとえば、氷海を航海する観測船が厚い氷に乗り上げた際の不規則な揺れ（第6章 海洋観測船の生活と調査研究の日々）や、水中考古学において「奈落の底」と感じられた海が「神秘的な世界」に変わっていくさま（第7章 地中と海に陶磁器を追いかけて）や、調査地での文献収集を「胸の高鳴る宝探し」と形容する実感（第4章 人との交わりから見る）などは、その場で体験した者でなければ綴れない説得力にあふれている。

「見方」を規定する文化と作法

さて、NPO 法人 FENICS が企画する「100 万人のフィールドワーカーシリーズ」のうちの一卷である本書は、タイトルにもあるとおり、特にフィールドの「見方」に焦点を当てている。この「見方」とは、フィールドにおいて何をどのように発見するかということ、つまり、対象（何）と手法（どのように）を合わせたフィールドワーカーのアプローチを総称したもの、と定義される（イントロダクション）。

まず、この「見方」を規定する、それぞれの学問分野の文化や作法が実に面白い。集団生活で共同作業しながら調査を進める考古学や海洋観測では、なにやら楽しげだが、「ええい、ままよ」と覚悟を決めて飛び込まなければならない通過儀礼のようなものが紹介されている。ロシアの「考古学の日」を祝うイベントでは、調査初参加の若者に対して、考古学の素晴らしさとフィールドでの苦労を模擬体験させるために、顔に泥を塗られたり湖に投げ込まれたりするのだという（第5章 シベリア・極東ロシアの遺跡を掘る）。観測船調査についてのエッセイ（第6章）では、船内でのありあわせの仮装パーティや、北極圏・南極圏の通過儀式（ときにはバリカンで頭を刈られたり、放水を浴びせられたりすること！）が紹介される。

文化人類学においても学問の文化や作法がある。文化相対主義と非・自文化中心主義は文化人類学の基本態度であり、自然人類学者もこうした見方に親しんでいることと思う。しかし、こうした文化人類学の基本態度は、達成率や統計などの数字と近代医学を絶対なものとする国際保健とは、たとえフィールドと対象を同じくしていても、ときに齟齬が生じることもあるという（第11章 マラリア研究をめぐるアプローチいろいろ）。それぞれの得意な役割と苦手な役割を自覚し、相補的に研究を進めることが重要であると、実例をもとに述べられる。

ふとした場面やなにげない説明からも、学問分野の文化や作法が感じ取れる。生態人類学には、先輩から言い聞かされる「現地の人の家に泊まれ」、「調査の成功の半分は調査助手にかかってい

る」などの教えがあるとのこと（第2章 人とバナナのかかわりを探る方法を求めて）。こうした教えには「うんうん、そうだよ」と納得する一方、海洋観測（第6章）では「観測の成功の9割は準備段階で決まり、現場でできることは1割に過ぎない」という教えがあるそうで、いつもフィールドで自身の準備不足を嘆く我が身を顧みると「うっ…」と胸に手を当てて崩れ落ちる。単語も文法もあまり知られていない言語の調査では、話者の発音を調査者がひたすら真似て、同一の発音を習得できた後に、「国際音声字母」という世界共通の発音記号を使ってその単語をノートに書き留めるのだという（第3章 ことばから人と文化と社会へ）。そんな記号があるのか…！と感心したのであった。

さまざまな視点という共通解

「何をどのように発見するか」という本書のテーマについて、ほとんどすべてのエッセイで、「さまざまな視点を手に入れること」が解となっている点は非常に興味深い。収録されたエッセイごとに、研究対象や分野は多様なのに、その解は共通しているのだ。手に入れる視点がどのようなものかはそれぞれ異なっているが、ある程度の形式化が可能であろう（図1）。

まずは、研究者本人が対象を見る視点がある（図1a）。地理的に日本と近接している中国浙江省では、共通している植物が多く、日本の植物図鑑が役に立つのだという。そして、日本の植物相の知識を持っておけば、日本では見ることのできない植物が「浮いて」見えるのだという（第1章 まだ見ぬ宝を求めて）。災害などの不幸な出来事に起因して形成された遺跡などにおいては、フィールドのなかに感情が取り込まれがちになるため、適切な距離を置いた視点も必要となるという（第7章）。研究者が自身の視点をアップデートすることで、見えるもの／見えないものが変化していく。

同じフィールドに入る他の研究者の視点から学ぶこともある（図1b）。考古学では、堆積層に対する認識の差から新たなアイデアが生まれ（第5章）、海洋観測では、限られた人数の観測チー

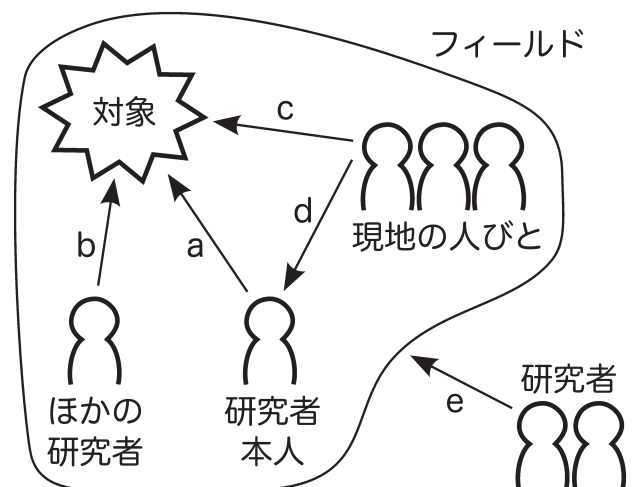


図1 フィールド研究におけるさまざまな視点。特に文化人類学の研究においては、「現地の人びと」が研究の「対象」となることも多いが、図では別々に描いてある。

ムのあいだで協力しあって観測を実施し、その姿勢はほかの研究者にも見られており、その後のキャリアに関わってくることもあるという（第6章）。調査を共同で実施する場合、フィールドで他分野の研究者との距離は否が応にも近くなり、議論や協力から新たな成果が生まれる。

文化人類学の場合は特に、調査対象となる人びとの視点を理解することも重要である（図1c）。ウガンダにおいてバナナの栽培品種を調べた際には、人びとは「どんな品種をもっていますか？」という質問に対しては全部を挙げるができなかったものの、想定される品種リストについてイエスカノーかを答えてもらう形式では正確な返答が得られたという（第2章）。興味深いことに、パプアニューギニアでの調査のエッセイにおいても同様の傾向が記述されており、時計やカレンダーの存在を前提にした「いつ発熱しましたか」という質問には混乱が生じたため、現地の人びとの健康状態をより調べるため、より具体的な質問項目に切り替える必要があったという（第8章 ひとり学際研究のすすめ）。現地の人びとの考え方や視点を知ることが、異文化理解のためだけでなく、研究を正確に遂行するためにも重要なのだ。

フィールドにおいては、研究者は見られる対象でもある（図1d）。毎日のように飲んでいた炭酸飲料製品が現地の人びとにとっては高級品だったことに気づいて自身を恥じた経験が、研究者でもあり医者である自身が患者から見られている視点と重なるところがあるといった経験談（第9章 日本とケニアの小島にて）は印象深い。この経験談は「見られる対象としての研究者」の象徴的な例であるとともに、異なる視点の獲得がその後の仕事に活かした好

例でもあろう。

最後に、そうした研究の営みを外から眺める視点もある（図1e）。たとえば、ときに「主流の」工学研究者からは眉をひそめられることもある、土木工学における文化人類学的なアプローチも、ものづくりを通して人びとの生活を改善するまぎれもない工学だというこだわりが熱く述べられる（第10章 ベンガルの農村で飲料水と素汚染問題に向き合う）。探求の結果、複数の分野をまたぐ手法をとることになり、それぞれの分野の特徴を比較しながら述べる視点も提示される（第4章、第8章）。ほぼすべてのエッセイで、自身の研究が含まれる学問分野が概説されているが、ここには各執筆者が自身の分野に向ける視点が表れる。

おわりに

本書では、さまざまな分野・対象・フィールドではたらく研究者が、それぞれの学問分野の概説から個別の研究のプロセスまでを、わかりやすく丁寧に綴っている。未知の世界に全身ごと飛び込んで徐々に何かを明らかにしていくという、フィールドワーク研究の醍醐味を追体験できるかのようである。経験を積んだ研究者には、論文には書かれない他分野の流儀や研究のプロセスを知ることができる点で、これから研究者を目指す大学生や高校生には、さまざまな分野の概説や研究という生業の実際を学べる点で、大いに勧められるものである。

薦谷 匠

（京都大学大学院理学研究科、日本学術振興会）